

令和元年6月17日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04095

研究課題名（和文）保育カンファレンスの形態による実践的思考の表出と熟達化

研究課題名（英文）Proficiency and the expression of practical thinking in different types of childcare conferences

研究代表者

廣瀬 聡弥（HIROSE, Toshiya）

奈良教育大学・学校教育講座・准教授

研究者番号：40419461

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼稚園の園内研修において、公開保育とビデオを用いた保育カンファレンスという2つの形態を比較し、保育者の非言語行動や実践的思考について調べた。その結果、ビデオを用いた保育カンファレンスでは、笑顔が多く、子どもに関する内容や事実を述べているものが多かった。一方、公開保育後の保育カンファレンスでは、うなずきが多く、保育者やカリキュラムに関する内容や印象、発展に関する発言が多かった。公開保育後のカンファレンスでは指導案があり、保育目標が明確なために共感的な行動として表れ、ビデオを用いたカンファレンスでは、笑顔の同調が高いことから、感情を共有し本音で語ることに繋がること示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在は、保育の長時間化に伴い園内研修の時間を捻出することが難しくなり、短時間で効率のよい研修が求められている。既存の研究において、保育者の専門性の向上のために、状況に応じながら暗黙的に問題に気づき、問い直しながら実践する実践的思考の重要性が述べられている。そこで、本研究では、園内研修として、保育者がビデオ映像を途中で中断せずに視聴しながらカンファレンスを行う方法と、公開保育後にカンファレンスを行う方法を比較することにより、その役割を明確にし、短時間で効率のよい研修のあり方に関する科学的な実践力向上プログラムの作成に向けて寄与するものと期待できる。

研究成果の概要（英文）：The types of childcare conferences conducted at preschool, in-school training programs include training by using teachers' conferences after class observations and training using videos. These training methods were compared, and teachers' nonverbal behaviors and practical thinking were examined. The results indicated that many teachers smiled and spoke about the children's behaviors in conferences that use videos. On the other hand, many teachers often nodded and spoke about the impression of teachers, contents of curriculums, as well as their development in conferences that use after class observations. Conferences after class observations have a guidance plan that clarifies the goals of education and care, which might be reflected in the teachers' empathetic behaviors. On the other hand, in conferences using videos, conforming smiles were often observed, which might lead to sharing emotions and developing open and honest conversations.

研究分野：幼年教育学，発達心理学

キーワード：実践的思考 保育カンファレンス 熟達化 保育者 園内研修

## 1. 研究開始当初の背景

保育者や教師は他の職業の熟達過程と比べ、以下の2点の特徴を有している。まず、他の多くの職業の場合は職業に就いてから初めて新参者として知識を得ていくのに対し、保育者や教師は職業に就く以前に長い被教育経験を持ち、保育・授業についてよく知っている観察による徒弟制がある(Hammerness et al., 2005)。次に、多くの職業の場合は先輩や同僚の仕事を観察しながらより高度で責任ある仕事を少しずつ任されるのに対し、教職の場合は授業に関しては新任者も全責任が委譲され、教室という閉鎖的な空間のために他者の仕事の様子を観察する経験が少ない。そのような特徴を有する職業である保育者や教師が、どのように熟達するのかを理解し、実践者教育を行っていくかは非常に重要なテーマである。なぜなら、熟達化のメカニズムを理解できれば、保育者や教師の教育プログラムに活用することが期待でき、子どもの保育や教育に反映させることができるからである。

多くの研究が小学校や中学校の教師を対象とし、様々な場面(授業前、授業、授業後)における認知過程について調べ、特に授業場面は多面的、同時的、そして予測不可能なできごとが生じるといった特徴から、教師の実践的知識にとって重要であることがわかっている。熟練教師は、多くの授業を通して様々な状況を経験し、授業で生じたできごとに対して即興的に意味を見出すことができる(Berliner, 1986)。

しかし、長時間経験したからといって全ての教師がエキスパートになれるわけではなく、成長する者とそうでない者がいる。教師はリフレクションと実践を繰り返しながら、自動的に扱える技術、すなわちルーティンを形成する。このルーティンが、教師が授業を実践するうえでの効率性を支えるものとなる。しかし、生徒にそれが適さない時、ルーティンを転換する必要が生じ、自身の信念や思考枠組みを問い直すリフレクションが求められる。そうした効率性と革新を経て、教師は成長する(Hammerness et al., 2005)。つまり、リフレクションが力量形成の中核として捉えられている(坂本, 2007)。リフレクションは自らの視点や思考枠組み、信念を問い直す実践的思考法である。その中でも、状況に応じながら暗黙的に何が問題なのかということに気づき、問題枠組みそのものを問い直しながら実践すること(reflection in action)の重要性が指摘されている(秋田ほか, 1991; Shone, 1983)。

そのような中、保育者や教師の専門性を高めるために、園内・校内研修の役割について報告されている。日本は伝統的に学校を中核として園内・校内の研修で保育や授業を検討しあう自律的な教師文化を形成してきた。小学校において研究授業や授業研究が盛んに行われ、教師の熟達化や教育にとって重要である(Lewis, 2000)。幼稚園や保育所においても保育研究や研究保育といった同様の研修がある。加えて、保育カンファレンスと呼ばれる医療現場における専門家が行う臨床事例についての意見交換や協議を保育に適用したものがあり、保育カンファレンスを通して保育者は同僚と学び合い、多様な意見を交わすことで日々の保育を振り返り新たな気付きを得るとともに、保育者間の感情の共有につながる事が指摘されている(中坪ほか, 2010, 2012)。

しかし、現在の保育現場では、保育の長時間化に伴い園内研修の時間を捻出することが難しくなっている。また、従来の園内研修では、他の保育者が保育実践している状況を観察し、その後討議していたが、当然、その時間帯は保育中であるためじっくりと観察することできないという問題がある。そのため、短時間で効率のよい研修が求められている。

そのような中、授業場面のビデオを活用することにより、教師の気づきに関する有効性が指摘されている(Sherin & van Es, 2005)。また、保育カンファレンスにおいてもビデオを活用し、知の再構成の場、感情の共有と自己開示の場、そしてコミュニケーションの場としての役割が指摘されている(中坪ほか, 2010, 2012)。しかし、ビデオの視聴方法、カンファレンスを行う際の構成員や人数による影響、そして保育者の熟達化に関する基礎的な実証データが乏しい。

まず、ビデオの視聴方法については、多くの研究において論じられることが少ない。しかし、授業後に授業のビデオ映像を再生して授業者に観察させながらインタビューで各場面での思考や判断を想起させて語らせる VTR 再生法(stimulated recall method)では、未知の不確定な状況で行われる選択や判断の実践的思考を反映しないと指摘されている(佐藤ほか, 1990)。そこで、Hirose et al. (2015)は、佐藤ほか(1990)の On-line monitoring(教師が他者の授業のビデオ映像を途中で中断せずに視聴しながら自由に発話)、Off-line monitoring(視聴直後に授業に関するレポートを書く)を用い、各 monitoring が質的に異なる思考を測定していることを定量的に明らかにした。つまり、On-line monitoring では児童に注目し、授業文脈から児童や授業者の発話意図などについて気づき、表象、解決、リフレクションといった実践的思考過程を表していた。一方、Off-line monitoring では授業全体の構成について記述することが多く、授業後の全体的なリフレクションといった思考を表していた。上述の研究は個人を対象に行ったものであるが、カンファレンスのようなグループにおいても影響すると考えられる。

次に、カンファレンスを行う人数や構成員について、特に園長や主任などの構成員による影響が指摘されている(e.g., 中坪, 2013)。しかし、カンファレンスの目的として、他者の考えを解釈しながら自分の理解を深めるという実践的思考を深めるためには、保育者相互の発言の共有が活発になるような人数や構成員、そして構成員の役割等の検討が必要である。

## 2. 研究の目的

本研究では、幼稚園の園内研修において、公開保育とビデオを用いた保育カンファレンスと

いう2つの形態を比較し、保育者の非言語行動や実践的思考、熟達化について調べた。

### 3. 研究の方法

#### 3.1. 協力園と研究協力者

本研究は、在籍園児数101名の小規模幼稚園で行った。研究協力者である保育者は、若手A、若手B、中堅C、中堅D、ベテランE、ベテランF(主任)、ベテランG(副園長)の7名であった。

#### 3.2. カンファレンスの手続き

公開保育後のカンファレンス：保育者が公開保育を観察し、その後、保育カンファレンスを行った。

ビデオを用いたカンファレンス：保育実践者が撮影した映像を見ながら、保育カンファレンスを行った。撮影する保育の内容は、実践者が他の保育者に見てもらいたいものとした。

2つの保育カンファレンスにおいて、実践者を含めた保育者の発言や行動は、360°の動画撮影が可能なミーティングレコーダーを用いて録画した。

#### 3.3. 分析方法

本研究において、様々なカテゴリーを用いて分析を行った。まず、保育者のうなずきと笑顔という非言語行動に着目した。なぜなら、うなずきは会話を生き生きとさせたり、スムーズに運ぶ機能があり(近藤, 2005)、笑顔は会話を和やかにする機能がある(Hess, et al., 1999)からである。うなずきと笑顔の定義について、うなずきを「頭部の上下運動を対象とし、発話を伴う場合、発話のみの場合も含めたもの」とし、笑顔を「微笑んだり(頬・目元・口元から判断)、声を出して笑ったりしている状態」とした。各保育者のうなずきと笑顔の生起頻度は、10秒を1コマとするワンゼ口法(Altmann, 1974)を用いた。

次に、話し合いの内容を「子どもに関する項目」、「保育者に関する項目」、「カリキュラムに関する項目」の3つに分類した。また、保育者の思考段階については、Hirose et al. (2015)を参考に、「事実」、「印象」、「発展」の3つのカテゴリーに分類した。

検定には、IBM SPSS Statistics V25を用いた。

### 4. 研究成果

#### 4.1. 研修形態とうなずきの関連

カンファレンスに参加している各保育者のうなずきの有無についてコーディングを行った。そして、保育者間の同調レベルを調べるために、10秒間に誰もうなずいていなかったのか(0人)、1名だけがうなずいていたのか(1人)、成員の2名以上7割未満がうなずいていたのか(低同調)、7割以上がうなずいていたのか(高同調)の4つに分類した。そして、うなずきの同調レベルと研修形態によって偏りがあるのかを調べるために<sup>2</sup>検定を行い、偏りが有意であることがわかった( $\chi^2(9)=178.0, p<.01$ )。そこで、残差分析を行ったものを表1に示す。

ビデオを用いた保育カンファレンスでは、誰もうなずいていないが期待値より有意に多く、1名あるいは低同調が期待値より有意に少ないことがわかった。一方、公開保育後の保育カンファレンスでは、誰もうなずいていないが期待値より有意に少なく、1人あるいは低同調において有意に多いことがわかった。つまり、ビデオを用いたカンファレンスでは、うなずきが少なく、公開保育のカンファレンスではうなずきの同調レベルが高いことがわかった。

#### 4.2. 研修形態と笑顔の関連

笑顔についても、うなずきと同様の方法でコーディングと分類を行い、笑顔の同調レベルと研修形態によって偏りがあるのかを調べるために<sup>2</sup>検定を行い、偏りが有意であることがわかった

表1 研修形態とうなずきの同調レベルの関連

同調レベル	ビデオ		公開保育	
	実践者B	実践者E	実践者B	実践者E
0人	35 (10.8) 8.4 **	41 (18.4) 6.2 **	47 (62.3) -3.0 **	0 (31.5) -7.1 **
1人	10 (18.6) -2.4 *	14 (31.9) -4.0 **	94 (107.9) -2.2 *	95 (54.6) 7.3 **
低同調	19 (10.8) -2.4 **	38 (49.3) -2.2 *	190 (166.7) 3.3 **	82 (84.3) -0.4
高同調	9 (10.8) -1.8 **	32 (25.4) 1.6	92 (86.1) 1.0	37 (43.6) -1.3

注：表内上段：回数(期待値) 下段：調整済み残差  
\*p<.05, \*\*p<.01, 両側検定

表2 研修形態と笑顔の同調レベルの関連

同調レベル	ビデオ		公開保育	
	実践者B	実践者E	実践者B	実践者E
0人	25 (55.2) -8.6 **	69 (94.5) -5.7 **	338 (319.7) 3.0 **	199 (161.7) 6.9 **
1人	15 (5.1) 4.8 **	10 (8.7) 0.5	23 (29.4) -1.7	10 (14.9) -1.5
低同調	8 (3.4) 2.7 **	15 (5.8) 4.2 **	14 (19.8) -1.9	2 (10.0) -3.0 **
高同調	25 (9.4) 5.7 **	31 (16.0) 4.3 **	48 (54.2) -1.3	3 (27.4) -5.8 **

注：表内上段：回数(期待値) 下段：調整済み残差  
\*\*p<.01, 両側検定

( $\chi^2(9)=147.0, p<.01$ )。そこで、残差分析を行ったものを表2に示す。

ビデオを用いた保育カンファレンスでは、笑顔が見られないが期待値より有意に少なく、笑顔の低同調、高同調が有意に多いことがわかった。一方、公開保育後の保育カンファレンスでは、笑顔が見られないが有意に多く、低同調が少ないことがわかった。つまり、ビデオを用いたカンファレンスでは、笑顔が多く同調しており、公開保育後のカンファレンスでは笑顔が少ないことがわかった。

#### 4.3. 話し合いの内容と思考段階

話し合いの内容について、「子どもに関する項目」、「保育者に関する項目」、「カリキュラムに関する項目」の3つに分類した。さらに、その内容に関する保育者の思考段階について、「事実」、「印象」、「発展」の3つのカテゴリーに分類した。そして、実践者(B, E)、研修形態(ビデオ、公開保育)、内容(子ども、保育者、カリキュラム)、思考段階(事実、印象、発展)の4次元の変数間の関連を調べるために、対数線形モデルによる分析を行った。その結果、[研修形態\*内容][研修形態\*思考段階][研修形態\*実践者]が最も適切なモデルとして採用された( $G^2(24)=15.1, p=.92, AIC=-32.9$ )。研修形態が内容、思考段階、実践者と関連していることから、周辺分割表を作成し、各セルについて残差分析を行った。

まず、研修形態と内容について、ビデオを用いた保育カンファレンスでは子どもに関する内容が期待値と比較して有意に多く、一方で公開保育後の保育カンファレンスでは保育者やカリキュラムに関する内容が有意に多いことがわかった。次に、研修形態と思考段階について、ビデオを用いた保育カンファレンスでは事実による発話が期待値と比較して多く、一方、公開保育後の保育カンファレンスでは印象による発話が期待値と比較して多いことがわかった。最後に、研修形態と実践者について、ビデオを用いた保育カンファレンスではベテランEの実践において発話が期待値と比較して多く、一方、公開保育後の保育カンファレンスでは若手Bの実践において発話が期待値と比較して多いことがわかった。

以上の結果より、ビデオを用いた保育カンファレンスでは、うなずきが少なく、笑顔が多いということがわかった。また、子どもに関する内容と事実を述べているものが多いということが明らかになった。一方、公開保育後の保育カンファレンスでは、うなずきが少なく、笑顔が少ないということがわかった。また、保育者、カリキュラムに関する内容と印象、発展の思考レベルの発言が多いということが明らかになった。ゆえに、ビデオを用いた保育カンファレンスは、笑顔が多いため雰囲気は良いものの、事実のみを述べているものが多く、学びが浅く、一方で公開保育後の保育カンファレンスは、笑顔が少なく余裕はないものの、発展した発話やうなずきが少なかった。

公開保育を活用した研修では指導案があり、保育目標が明確なために共感的な行動として表れたと考えられる。一方、ビデオを活用した研修では、笑顔の同調が高いことから、感情を共有し本音で語ることに繋がること示唆された。

#### 引用文献

- 秋田喜代美・佐藤学・岩川直樹 (1991) 教師の授業に関する実践的知識の成長：熟練教師と初任教師の比較検討. 発達心理学研究, 2, 88-98.
- Altmann, J. (1974) Observational study of behavior: Sampling methods. Behaviour, 49, 227-267.
- Berliner, D. C. (1986). In pursuit of the expert pedagogue. Educational Researcher, 15, 5-13.
- Hamerness, K., Darling-Hammond, L., Bransford, J., Berliner, D., Cochran-Smith, M., McDonald, M., & Zeichner, K. (2005) How teachers learn and develop. In L. Darling-Hammond & J. Bransford (Eds.), Preparing teachers for a changing world: what teachers should learn and be able to do. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Hess, U., Philippot, P., & Blairy, S. (1999) Mimicry; Facts and Fiction The Social Context of Nonverbal Behavior. In P. Philippot., R. S. Feldman., & E. J. Coats. (Eds.), pp. 213-241.
- Hirose, T., Koda, N., Nishio, M., & Yamada, Y. (2015) Assessing practical thinking of teachers for use in teacher education. Innovative Teaching, 4, 1-8.
- 近藤富英 (2005) 非言語行動である「うなずき」の機能とその役割への一考察. 人文科学論集, 39, 55-63.
- Lewis, C. (2000) Lesson study: The core of Japanese professional development. Paper presented at the meeting of the American Educational Research Association, New Orleans, USA.
- 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・安見克夫 (2012) 保育カンファレンスにおける談話スタイルとその規定要因. 保育学研究, 50, 29-40.
- 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・安見克夫・砂上史子・箕輪潤子 (2010) 保育カンファレンスにおける保育者の語りの特徴—保育者の感情の認識と表出を中心に—. 乳幼児教育学研究, 19, 1-10.

- 中坪史典 (2013) 保育者の専門性を高める園内研修 : 多様な感情交流の場のデザイン. 発達, 34, 46-52.
- 坂本篤史 (2007) 現職教師は授業経験から如何に学ぶか. 教育心理学研究, 55, 584-596.
- 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美 (1990) 教師の実践的思考様式に関する研究(1) 東京大学教育学部紀要, 30, 177-198.
- Schön, D. A. (1983) The reflective practitioner: How professionals think in action. New York: Basic Books.
- Sherin, M. G., & van Es, E. A. (2005) Using video to support teachers' ability to notice classroom interactions. Journal of Technology and Teacher Education, 13, 475-491.

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 2 件)

- 廣瀬聡弥・山田芳明・西尾正寛 幼稚園と小学校における造形遊びの実践と行動の変容. 次世代教員養成センター研究紀要, 4, 95-101. 2018.
- Koda, N., Kutsumi, S., Hirose, T. & Watanabe, G. Educational possibilities of keeping goats in elementary schools in Japan. Frontiers in Veterinary Science, 3, 1-8. 2016.

### 〔学会発表〕(計 6 件)

- 廣瀬聡弥 園内研修の形態による実践的思考の表出と共有. 日本保育学会 第 72 回大会, 2019.5. 於 大妻女子大学
- 平林祥・岩淵善美・廣瀬聡弥・中橋美穂・埋橋玲子 大阪府における私立幼稚園等園長のリーダーシップに関する意識調査 ~ 幼児教育の質向上システム OPARK(オパーク)の開発に関連して~. 日本保育学会 第 72 回大会, 2019.5. 於 大妻女子大学
- 平林祥・岩淵善美・廣瀬聡弥・埋橋玲子 幼児教育の質評価(OPARK)の開発. 日本乳幼児教育学会 第 28 回大会, 2018.12. 於 岡山大学
- 岩淵善美・廣瀬聡弥・平林祥・埋橋玲子 幼児教育の質評価(OPARK)の開発 ~ 園長のリーダーシップに関する意識調査~. 日本乳幼児教育学会 第 28 回大会, 2018.12. 於 岡山大学
- 廣瀬聡弥 園内研修の形態による実践的思考の表出と共有過程. 日本発達心理学会 第 27 回大会, 2016.4. 於 北海道大学
- 廣瀬聡弥 モニタリングによる教師の実践的思考の多様性. 日本心理学会 第 79 回大会, 2015.9. 於 名古屋大学

### 〔図書〕(計 1 件)

- 廣瀬聡弥 (2019) 仲間関係を通して育つことってなんだろう?. 藤崎亜由子・羽野ゆづ子・渋谷郁子・網谷綾香(編) あなたと生きる発達心理学, pp.196-203 ナカニシヤ出版

### 〔その他〕

ホームページ等

<https://researchmap.jp/read0076464/>

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

該当なし

### (2)研究協力者

該当なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。